

II

事業報告



平城宮跡の文化財多言語展開

—文化庁文化財多言語解説整備事業の報告を中心に—

高田 祐一・奈良文化財研究所

Developing Foreign-Language Materials for the Nara Palace Site: A Project Report

Takata Yuichi・Nara National Research Institute for Cultural Properties

多言語解説事業／Multilingual Explanation Development Project 平城宮跡／Nara Palace Site
復元CG／CGI reconstruction リーフレット／Brochures
奈良文化財研究所収蔵品データベース／NABUNKEN Collection

はじめに

奈良文化財研究所（以下、奈文研）では、2020年度に平城宮跡を中心に多言語解説事業を推進した。本稿ではその意義や実績を報告するものである。

1. 事業の枠組みとねらい

1.1 文化庁補助事業

文化庁では「訪日外国人旅行者数の増加及び訪日外国人旅行者が地域を訪れた際の地域での体験滞在の満足度を向上させるため、文化財に対して先進的・高次元な多言語解説を整備する事業を、観光施策と連携させつつ実施する事業」^[1]として国庫補助を実施している。奈文研では令和2年度文化財多言語解説整備事業に申請し、採択された。また、国立文化財機構として多言語化に取り組んでいる事業もあったため、相乗効果があるよう推進した。

1.2 多言語化の目的と対象

特別史跡平城宮跡は、約1300年前の日本の中心であり、天皇の住まいや官公庁があった。奈文研は平城宮跡を1950年代から調査し、その貴重な成果を平城宮跡資料館で展示している。さらなる外国人観光客等の誘客や満足度の向上を目指

[1] 文化庁令和2年度文化財多言語解説整備事業
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/tagengokaiseiki_seibijigyo/92059901.html (2021年12月9日確認)

し、従来の解説パネルに加えて、総合的に多言語コンテンツを磨き上げ、体系的に連携させることで情報発信の劇的な強化を図った（図1）。

そのために、①幅広く知ってもらう（平城宮跡資料館Webサイトの4か国語対応）、②展示品に関心を持ってもらう（多言語対応展示解説データベース整備・多言語対応アプリ開発）、③平城宮跡を体感し感動する（平城宮跡CG制作・ARアプリ開発）、④より深く理解してもらう（アプリやデータベースと連携した多言語対応リーフレットの整備）、の大きな4つの施策を推進した。

本事業では、特別史跡平城宮跡や国宝平城宮跡出土木簡等を対象にした。これらは、日本における古代国家形成の重要な文化財である。外国人来館者には、より丁寧でわかりやすい解説や情報発信が必要である。奈文研で雇用する各言語ネイティブの研究者が従事し、外国人来館者にとってわかりやすい内容となっているか等のチェックおよび監修の体制を構築し、リライト・校正作業を実施した。

平城宮跡資料館 特別史跡平城宮跡に関する 多言語解説情報発信強化事業

4つの施策を体系的に連携させることで多言語コンテンツの劇的な強化を図る



図1 多言語化事業の全体構想図

1.3 体制と役割

奈文研の文化財多言語化は企画調整部文化財情報研究室が所管しているため、翻訳や全体統括は文化財情報研究室が担った。事務的な支援を研究支援推進部連携推進課経営戦略係が担当した。各コンテンツでは専門性が必要であるため、都城発掘調査部史料研究室、文化遺産部遺跡整備研究室、企画調整部展示企画室と共同で推進した。

2. 多言語化への各取り組み

2.1 幅広く知ってもらおう(奈文研および平城宮跡資料館Webサイトの4か国語対応)

外国人観光客は、日本への出発前および来日中にインターネットで情報収集を実施する。そのため、施設のWebサイトを多言語対応することは必須である。しかし、奈良文化財研究所のWebサイトは日本語と英語のみ、平城宮跡資料館のWebサイトは日本語版のみであったため、英語・中国語・韓国語版を作成した(図2)。Webサイトの多言語コンテンツの量については、まだ十分とはいえないため、継続的に増強していく予定である。



図2 平城宮跡資料館外国版のWebサイト

Nara National Research Institute for Cultural Properties Collection

Search Top > Detail



1 / 3
< Prev Zoom Next >

Shield

Material : Cypress wood

Dimensions : H 152.3 cm, W 49.6 cm, T 1.4 cm

Site : 6AD4 FH73 SE1220

Description : Wooden shield used by the Hayato. The Hayato people lived in the southern regions of Kyushu. The Hayato in the Palace were in charge of guarding the ester. This shield is one of the fifteen shields that were recycled to build the walls of a wall inside the Nara Palace. It was common to recycle items in 8th-century Japan.

標題 : 倭人盾

材質 : 日本扁柏

尺寸 : 長152.3cm, 寬49.6cm, 厚1.4cm

時代 : 8世紀前半期

出土地點 : 平城宮6AD4區SE1220

價值 : 該盾牌是採用平城宮內非位的15枚倭人盾之一。倭人為九州南部原住民。據推測為宮門警衛。儀式時會將盾牌排列在宮門前，以他們獨特的裝飾方式裝飾野冢。

分類 : 倭人盾

材質 : 日本扁柏

尺寸 : 長152.3cm, 寬49.6cm, 厚1.4cm

時代 : 8世紀前半期

出土地點 : 平城宮6AD4區SE1220

價值 : 該盾牌是採用平城宮穴井欄的15枚倭人盾之一。倭人為九州南部原住民。據推測為宮門警衛。儀式時會將盾牌排列在宮門前，以他們獨特的裝飾方式裝飾野冢。

제목 : 하이토(倭人) 방패

소재 : 노송나무

크기 : 길이 152.2cm, 너비 49.0cm, 두께 1.4cm

날짜 : 8세기 전반

출토지 : 6AD4구SE1220

설명 : 후속 통로 자갈층위 하이토(倭人) 방패 15개 중 한

図3 多言語対応収蔵品データベース

설명 : 우물 틀로 재활용된 하이토(倭人)의 방패 15개 중 하나이다. 나라 시대에는 한번 사용한 물품을 전용하는 일이 빈번했다. 하이토란 미나미큐슈(南九州) 지역의 사람을 말하는데, 그들은 궁 문의 경비를 담당했다. 의식을 거행할 때는 이 방패와 장을 들고 문 앞에 정렬하여 독특한 발성법으로 사악한 기운을 물리쳤다고 한다.

日本語 : http://imapps.nie.jp/nabunken/det.html?data_id=109460

Fieldwork reports: <https://sitereports.nabunken.go.jp/21340>
<https://sitereports.nabunken.go.jp/62893>

URL : http://imapps.nie.jp/nabunken_world/det.html?data_id=109460

▲ PageTop

図4 出典となる報告書PDFへのURL

2.2 展示品に関心を持ってもらう(多言語対応収蔵品データベース整備・多言語対応アプリ開発)

平城宮跡資料館では多数の資料を展示しキャプション・解説パネルを設置している。しかし場所の制限から簡易な解説しか掲載できないのが実情である。また展示品の底面や、見えにくい部分については、展示スペースからの閲覧が困難であり、観覧の効果として改善の余地がある。そこで、普段は見ない部分の写真や詳細解説を多言語対応収蔵品データベースとして整備することで、観覧の効果をより増大させることとした(図3)。より詳細情報にアクセスできるよう情報の出典となった調査報告書PDFへのリンクも設定した(図4)。閲覧には、スマートフォンアプリである多言語対応解説支援アプリを活用した。展示品のキャプションに展示番号を貼付し、多言語対応解説支援アプリにて呼び出し、スマートフォンやタブレット等で閲覧する。収蔵品データベースには早稲田システム開発株式会社のI.B.MUSEUM SaaSを採用した。解説支援アプリには同社の「ポケット学芸員」を導入した。



図5 解説支援アプリ「ポケット学芸員」の操作風景。現物の展示品をまえに多言語での詳細情報にアクセスできる。

2.3 平城宮跡を体感し感動する(平城宮跡復元CG制作・ARアプリ開発)

平城宮を含む平城京の面積は、約2500ヘクタールあり、広大である。実際にすべてを歩くのは困難なため、復元CGを閲覧することで、理解することが効果的である。既に日本語版の復元CGは開発済みであったため、多言語解説などを追加し公開した(図6・7)。ただし前回の開発から調査研究が進んでいるため、最新の知見を盛り込んでCGを修正した。平城宮跡資料館で上映やYouTubeにてインターネット公開(2021年8月)をしている。

奈良文化財研究所では幢旗ARアプリ(日本語版)を運用している。日本において、天皇の元日朝賀および即位式は、現代においても重要な儀式である。この儀式に幢旗が使われた。平城宮跡の大極殿前にその実際の遺構が発見されており、宮廷儀礼を解明するうえで、非常に重要な発見となっている。この重要性を現地で体感できるようARアプリを運用しており、外国人観光客にも理解してもらえるように多言語化を図った。ただし、ボランティアガイドの方がタブレットを持ちながら運用するため、2020年度・2021年度においてはコロナ禍によってまだ本格稼働はできていない。



図6 平城宮跡復元CG(韓国語版)動画のサムネイル



図7 平城宮跡資料館内での動画上映風景

2.4 より深く理解してもらう（アプリやデータベースと連携した多言語対応リーフレットの整備）

外国人観光客は、体験型アクティビティの満足度が高いことが判明している。2020年1～3月期の訪日外国人消費動向調査では、日本滞在中に満足したと回答した人の96.2%は「日本の歴史・伝統文化体験」である^[2]。さらに、観光庁による訪日外国人消費動向調査（2019年7-9月期 【1次速報】）^[3]によれば、来日前には知り合いの口コミを重視し、行き先を決める傾向がある。またSNSでも情報収集し、感想をSNSで発信している。そこで、実際の来館者にとって、お土産として母国に持ち帰りたくなる・SNSの発信素材となる などを実現した多言語対応リーフレットを作成した。リーフレットには、展示を深く理解できるような内容とするうえ、SNSや帰国後の口コミ素材となり宣伝素材にもなるため、理解促

[2] 国土交通省観光庁『訪日外国人の消費動向 2020年1-3月期（速報）報告書』2020年7月
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/content/001354360.pdf>（2021年12月9日確認）

[3] 国土交通省観光庁『訪日外国人の消費動向 2019年7-9月期（速報）報告書』2020年1月
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/content/001323884.pdf>（2021年12月9日確認）

進と宣伝という2つの効果を見込める。題材として、国宝平城宮跡出土木簡を対象とした。

リーフレットは、来館者に捨てられないために、持って帰りたくなるようなリーフレットを目指した。形状も工夫し、変わったギミックで来館者がアッと驚き、楽しめるものを作ることを目指した。特殊変形印刷を活用した博物館リーフレットを管見の限り他に類例を知らない。詳細は奈文研ニュース80号「多言語化木簡解説リーフレット作成の試み」^[4]（図8）。



図8 多言語化木簡解説リーフレット

3. 効果を高めるため合わせて実施した施策

文化庁事業とは別に実施した作業について述べる。

3.1 フリーWifiの設置

訪日外国人が前述の多言語対応収蔵品データベースや多言語対応アプリを資料館現地で利用するためにはインターネット接続が必須である。そのため、2020年12月、平城宮跡資料館に無料Wifiを設置した。同時に藤原宮跡資料室および飛鳥資料館にも設置した^[5]。利用可能時間は、1回の接続当たり上限3時間（再接続可

[4] Yanase Peter・吳修喆・扈素妍「多言語化木簡解説リーフレット作成の試み」『奈文研ニュース』80号、2021年3月
<https://repository.nabunken.go.jp/dspace/bitstream/11177/9448/1/AA11581556-80-1t.pdf>
 (2021年12月9日確認)

[5] なぶんけんブログ「フリーWi-Fiははじめました」2020年12月22日公開
<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2020/12/202011223wifi.html> (2021年12月9日確認)

能)である。利用料金は無料である。いまやインターネット接続は社会インフラともいえるため、公共施設でWifi環境を提供することで、来館者の利便性が高まる。また、資料館の様子や感想等をSNSでリアルタイムに発信してもらうことで、周知の効果も高まることも見込まれる。

3.2 奈文研Webサイトの多言語化

展示施設の運営主体である奈良文化財研究所のWebサイトも多言語化(英語・韓国語・中国語(繁体字・簡体字))を図った。しかしながら、日本語ページのすべてを多言語化することは、必要リソースや更新性を考えると現実的ではないため、優先度の高いページのみを対象とした。コンテンツ不足であるため、今後増やしていく予定である。

3.3 資料館玄関ディスプレイ設置

資料館内部の多言語化を実現しても、それが外からわからない場合、入館する動機が低下する。資料館前の通行人にうまく訴求できれば、通行人から来館者に転じる。そのため、PRが重要であるが、特別史跡であることから新たに派手な設置物等は困難であることや、多様な情報をビジュアルで訴求することが効果的であるため、館内から外向けにPR用ディスプレイを新設した(図9)。ディスプレイの輝度の関係から見えにくいシーン(真夏日の晴れ日)は想定されうるものの、白を基調とした画面構成であれば、十分に外部から視認可能である。企画展情報なども流すことにより、PR効果が見込まれる。



図9 平城宮跡資料館入口のPR用ディスプレイ

4. 課題

2021年9月27日、文化庁多言語化事業の一環で公益社団法人日本観光振興協会から現地視察をうけた。翻訳文が高品質であることや、リーフレットのオリジナリティなど良い点を挙げていただいた一方、課題も指摘された。それは、Wifiや多言語解説アプリの存在や操作方法がわかりにくいといった点である。利用者目線で改善を継続していく必要がある。

おわりに

奈文研は平城宮跡をフィールドに調査研究を長年継続している。さらに将来にわたって最新の知見が蓄積していく。それに合わせて多言語化も常にバージョンアップを図っていく必要があるだろう。